論説

大友氏館跡出土土師器の層位学的検討

地層は、歴史的な形成、つまり実定性あるいは経験性である。
地層は「堆積層」であって、物と言葉、見ることと話すこと、見えるものと言いうるもの、可視性の地帯と、解読可能性の領野、内容と表現によって形成されている。
『フーコー』ジル・ドゥルーズより抜粋

上野淳也

一　はじめに

本論は、大友氏館跡における土器相の変遷を把握し、その変遷の意味を考察することによって、大友氏館跡の構造とその変遷を理解することを目的としたものである。

編年研究（chronology）には、本来、層位学的方法と型式学的方法との併用が望まれる。層位学的方法は、地質学における層位学を考古学に応用したもので、中でも「地層畳重の法則」と「地層同定の法則」は、生物学の「進化論」を応用した型式学的方法と併用することによって、編年研究の科学性を高めてきたものである。しかし、最近の研究は型式学的方法に偏重する傾向が強く、「進化論」に決定論的・目的論的であるという批判が集まる中において、自然科学的に前後関係を把握できる層位学的方法はあらためて重視されるべきである。

層位学的方法は、地理的・歴史的コンテクストに立脚し、有意味な完結性の内において解釈をおこなえる事に利点を有する。まずは、中世後期の豊後府内に所在した大友氏館跡比定地内出土の土師器を用いて、土師器の編年的研究をおこなう。

二　大友氏館跡出土土師器の層位学的検討

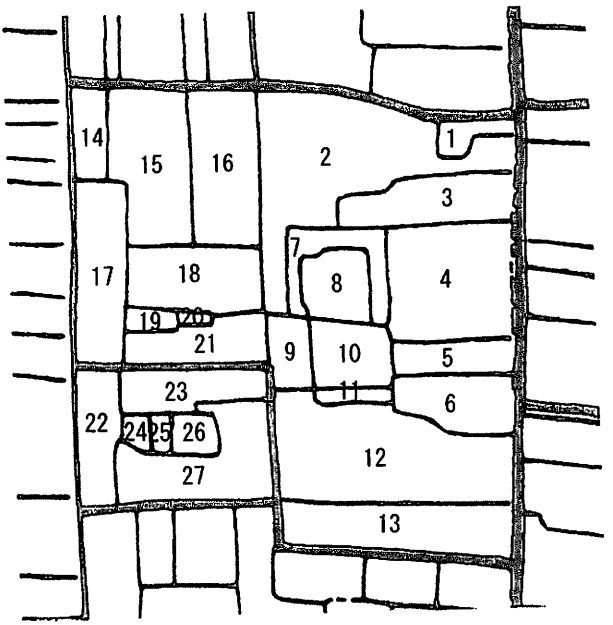
二―一　大友氏館跡の調査　―地理的・歴史的コンテクスト―

中世後期の内、戦国期府内の様子を伝えるものとして『府内古図』が伝えられている。その『府内古図』と寺院や史蹟の位置・明治時代の地籍図を照合させたものが昭和六十二年刊行の『大分市史』に掲載された「戦国時代の府内復元想定図」である。[1] その歴史地理学的な成果は、中世府内町跡の発掘調査の進展において検出された遺構群とかなりの部分での一致が確認されつつある。大友氏館跡は、この「想定図」の中に、方二町規模に想定されている。

館跡比定地内の地籍図（第1図参照）を参照すると、土地の管理には不適当な筆形状が多く見受けられる。この形状は、推定地内に存在する、もしくは過去に存在した起伏を要因とするもの、すなわち、三次元データが反映されたものである。この形状と起伏は、館景観の残滓とでもいうべきもので、館跡の範囲及び館内の施設配置、更には施設機能の解明にも有効であると考えられる。[3] 大友氏館跡は、『府内古図』を参照すると、[4] 東側に門が二つ並ぶ東面の館として描かれている。[5] これらのことから、当時の武家邸宅の範型である『洛中洛外図屏風』に描かれる将軍・管領邸を参考にすると、大友氏館跡の場合も庭園が南側に展開することから、[6] 東面の内、南側が唐門、北側が通用門であるという推論が成り立つ。

事実、大友氏館跡の調査において、「土師器の大量出土遺構」が集中して確認されるのは推定範囲内の東半分である（第1図筆番1～13・第1表参照）。「土師器の大量出土遺構」は、「土師器の大量消費行為」を表象する遺構であるとされ、この行為は、中世領主の居館跡において確認される特徴的な事象の一つとして挙げられる。この遺構は、「武家儀礼」の残滓であると考えられており、「大量出土遺構」の確認をもって、その儀礼執行が想定される。循環論的ではあるが、「土師器の大量出土遺構」の確認をもってして、その儀礼の執りおこなわれる場として居館跡比定を補強するものである。

また、「土師器の大量消費行為」は、居館や儀礼の「イデオロギー装置性」[7] を表象するものでもある点が指摘される。「方形



第１図　大友氏館跡推定範囲内地籍図（昭和62年『大分市史』案）

調査次数	代表的検出遺構	字番号	土師器大量出土土坑
第９次調査	区画施設	2	
第10次調査	土師器大量廃棄土坑	2	○
第14次調査	土師器大量廃棄土坑	3	○
第15次調査	土師器大量廃棄土坑	4	○
第13次調査	土師器大量廃棄土坑	3・4	○
第４次調査	区画施設	2・5	
第６・11次調査	礎石建物痕 土師器大量廃棄土坑	5・6	○
第16次調査	根石建物跡 土師器大量廃棄土坑	7・8	○
第12次調査	根石建物跡・井戸跡	8・12	
第１・３次調査	庭園跡	12・13	
第７次調査	築地跡・溝跡	14	
第８次調査	廃棄土坑	15	
第２・５次調査	区画施設・井戸跡	17	

第１表　大友氏館跡調査区一覧

館体制」に代表されるように居館や儀礼は、権力の「正当性」を再生産し続けるもので、権力に権威を与え、安定した支配を促進させるものとして機能したと理解することができる。[8]

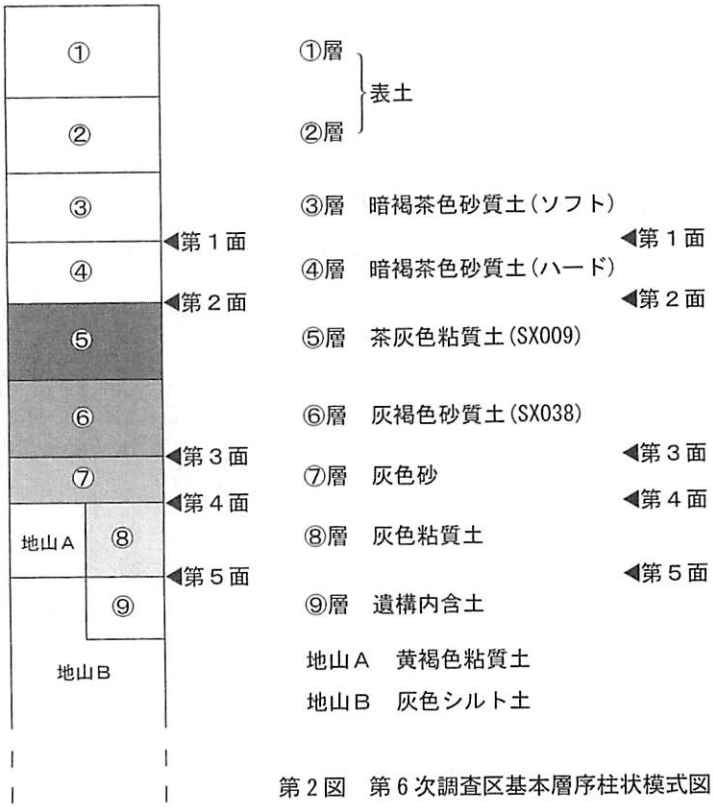
そして、大友氏は、この伝統的な支配の道具として用いられてきた「正当化」・「倫理化」装置を、領国内に敷設したものと考えられる。[9]したがって、豊後国の守護所たる大友氏館跡の土器組成は、領国内各地の土器組成の遷移に対してイニシアティブをとることが想定される。また、その館跡内の土器組成の変遷を把握することは、領国内における土器組成変化の意味をより良く解釈する上においても有意味なものとなるであろう。

本章においては、大友氏館跡の中枢部であると想定され、多数の整地層が確認されている第六次調査の層位学的成果を用いて、[10]土師器編年の中に潜在する変遷の意味を解釈、そして、理解することを目的とする。

二―二　土師器の出土層位　―地層堺重の法則―

大友氏館跡の第六次調査区B地点は（第7図参照）、地籍図などから中枢的な施設が存在していたと想定される地点に設置された。調査においては、盛土遺構を含む約一m程の厚みを持つ地業痕跡が確認された。また、盛土遺構下には、玉砂利や砂を敷く文化面も含めて大きく四面の遺構検出面が確認されている。

第六次調査区における基本層序を整理し柱状図化したものが第2図である。層序は、表土層（第2図①・②層）、近世の攪乱層である暗褐茶色砂質土層（ソフト・③層）、埋め立て整地の可能性のある暗褐茶色砂質土層（ハード・④層）、基壇状の盛土整地層である茶灰色粘質土層（⑤層）・灰褐色砂質土層（⑥層）、盛土整地以前の文化面を形成していた灰色砂層（⑦層）、掘込地業である可能性のある灰色粘質土層（⑧層）、人工層位下の地山面に形成される遺構内含土の順である（以下、①～⑨層）。よって、遺構検出面としては、④層上面（以下、第1面）、⑤層上面（第2面）、⑦層を含む⑧層上面（第3・4面）、⑧層に先行する遺構検出面（第5面）が挙げられる。



第2図　第6次調査区基本層序柱状模式図

第2面及び第3・4面に関しては、敷設されていたと考えられる砂や砂利が確認される部分が存在するため、比較的プライマリーな文化面であると考えられる。設定したトレンチは、確認調査であるため狭小なものであったが、層位の確認においては十分な成果が得られている。

最下面（第5面）においては、十四世紀後半～十五世紀代に比定される備前焼擂鉢[11]等が出土し、最上層（第④層）においては染付碗E群・染付皿E群[12]等の十六世紀後半代の遺物が出土する為、中世に帰属する（④層～⑨層或いは第2面～第5面までの）地業痕跡自体の年代幅としては、最大で十四世紀後半～十六世紀後半のおよそ二五〇年間の幅が考えられる[13]。よって、出土した土師器は、各検出面・層位に帰属させることで、二五〇年間の時間幅中に、相対的に位置付けることが可能である。

また、この層位学的成果に型式学的な検討を付すことで、層位ごとの土器組成の変遷傾向をも把握することができる。勿論、各層位は、整地層という人工層[14]であり、広義の包含層である為、一括性としては弱いものであるが、各文化面に帰属する遺構（すなわち遺構という完結性）を用いることによって、比較的ノイズの少ない良好な成果を得ることができた。しかし、大友氏館跡六次調査区出土資料に関しては、破片資料が多く、反転復元が可能なものをできる限り提示したものである。よって、厳密な法量の計測には適さない資料が大半を占めるのが現状である。

当然のことであるが、発掘調査は、層位に基づき上層から下層へ向かって遺構検出面を追って進展する。すなわち、調査自体は、時間を巻き戻すかのように進展するものである。その行為は、まさに「現代から過去」への遡行法的読解であるといえる[15]。次節においては、まず、この調査過程における時間経過、すなわち、「上層→下層」という時間経過にしたがって土師器の変遷（認識）過程を追う。

二―三　土師器の分類　―分類―

大友氏館跡六次調査においては、多数の土師器坏皿類が出土し、その組成率は全中世遺物中の九割以上を優に占める。本章においては、その坏皿類に関して年代観を与えるべく型式学的な検討を加える。まずは、大友氏館跡六次調査区出土土師器を概観し、大まかな類型化をおこなう。

大友氏館跡出土土師器は、その成形技術から「ロクロ成形品」と「手捏ね成形品」の二種類に大別できる。両製品は、共伴関係から、十六世紀の中頃には確実に併存するが、技術的にはロクロ成形技術が先行することが分かっている。また、同じロクロ成形品でも、「粘土紐巻き上げ後ロクロ成形技法」や「粘土板結合後ロクロ成形」・「粘土柱挽き出し技法」などの複数のロクロ成形技術が存在すると考えられる。この土器製作技術の差異としては、器面観察において「成形技法」や「ロクロ挽き時の工具」の存在が把握され、また、糸切り底の観察においては、「ロクロの回転速度」や「ロクロの回転方向」の把握が可能である。これらの観察は、技術系列の差異、ひいては技術者集団の差異をも示す根拠と成り得るものである[16]。

第3図は、大友氏館跡第六次調査区及び同地点の追調査である第十次調査において出土した各層および文化面に帰属する土師器を層序と分類に基づき整序したものである。[17] 図表中、成形技術と器形[18]に基づきA・B・Cと三群に大別してある。[19]

A群（A形状）

A群は、概ね「粘土紐巻き上げ後ロクロ成形技法」を基本技術とする中世前期的[20]な在地系土器の系列群と考えている。A群土師器は、口径と底径の差が余りないため（概ね3：2）体部が直立気味に立ち上がる器形を呈する土器群によって構成される（以下、形状を述べる際にはA形状と表現する。）。これらの土器は、内底面を顕著に平らに整形し体部を直立気味に立ち上げる特徴を備える。

器種としては、コースター形の小皿と、ハコ形の小坏と坏の三種が挙げられる。

B群（B形状）

B群は、「粘土柱挽き出し技法」を基本的な技術とする土器群によって構成される。B群土師器は、口径と底径に差がある（概ね2：1）ことから、口縁部へ向かって直線的もしくは内湾・外反しながら体部を開く器形を呈する土器群によって構成される（以下、B形状とする。）。B群内には、胎土が白色を呈し器壁が一～二㎜と非常に薄いものと、赤橙色・褐色のものが確認される。前者の極薄なB群土師器の成形には、熟練した工人の存在と共に回転速度の速いロクロが使用されたことが想定される。[21] なお、右回転ロクロによる成形品しか確認されないA群に対して、B群内には一定量の左回転ロクロによる成形品が確認される。[22]

器種としては、いずれも古相は器高の高い「坏形」、新相は器高の低い「皿形」を採っており、少なくとも3法量以上の法量分化が確認される。

C群

C群は、手捏ね成形品である。C群土師器は、豊後において導入される京都系の技術系列によって成形されたものであり、一型式として把握可能な群である。C群土師器の導入には、室町幕府系武家儀礼の本格的な導入を背景としていると考えられ、形式的には「皿形」で、法量も分化した状態で導入されたものと考えられる。現状で、6～7法量には分類が可能である。[23]

二―四　整地層と土器相　―型式学的方法―

大友氏館跡において確認された各整地層は、大友氏館跡内の改修という地業単位に置き換えることが可能である。したがって、各層は、地業回数を示すものであると同時に、改修を要した時期を示す。即ち各面は、時代性を反映するものでもあり、したがって、文化面ごとの遺物組成は、その展開を反映するものである。即ち、年代学上のメルクマールに置換することが可能である。

以下、各層位を年代の基準として、各文化面・整地層出土の土師器組成を土器相[24]（faize）と称し、時期把握上の一単位として整理する。まずは、前節でおこなった大別の分類群を用いて、第2図に対応させた第3図を調査手順通りに、上から下へと層位順に眺めてゆくこととする。なお、次節における叙述的位置付けの都合により、下層のものから順に早い相数を付している。この図表をもとに、各整地層と各文化面に帰属する土師器群の観察をおこなうことで、ある程度の土器組成の変遷傾向を読み取ることができよう。勿論、整地層と文化面の年代学的な解釈に際して、文化面に関しては、ある程度の使用期間が想定されるのに対し、整地層に関しては地業の回数を示すもので短期間なものであり、一括性は低く、あくまでも相対的なものであり、年代の物差しとしては等価・均一のスケールを備えるものではないことには留意が必要である。[25]

V相　盛土整地層（SX000）出土土器（土師器実測図未提示）

大友氏館跡第六次調査区のSX000層出土土器群が該当する。遺物層からは、染付碗E群・染付皿E群等の遺物が出土し、十六世紀後半以降の盛土整地層であると考えられる。本相は、他相が遺構検出面というある程度の使用期間を有するのに対し、

地業行為を示す鍵層を一つのメルクマールとして設定した。出土する土師器は、その大半を大量のC群が占め、続いて赤橙色を呈し溝状の成形痕跡を残すB群、極少量のA群が確認される。以下、赤橙色を呈し溝状の調整痕が確認される資料群を便宜上B―3群と呼称する。本相においては、B―3群・C群共に皿形を呈し、それぞれ、3法量以上の「法量分化」が確認される。

Ⅳ相　第2遺構検出面併行

本相には、大友氏館跡第六次調査区の第2面出土土器群が該当する。遺構の切り合い（破壊／被破壊）関係から、三区分が可能である。

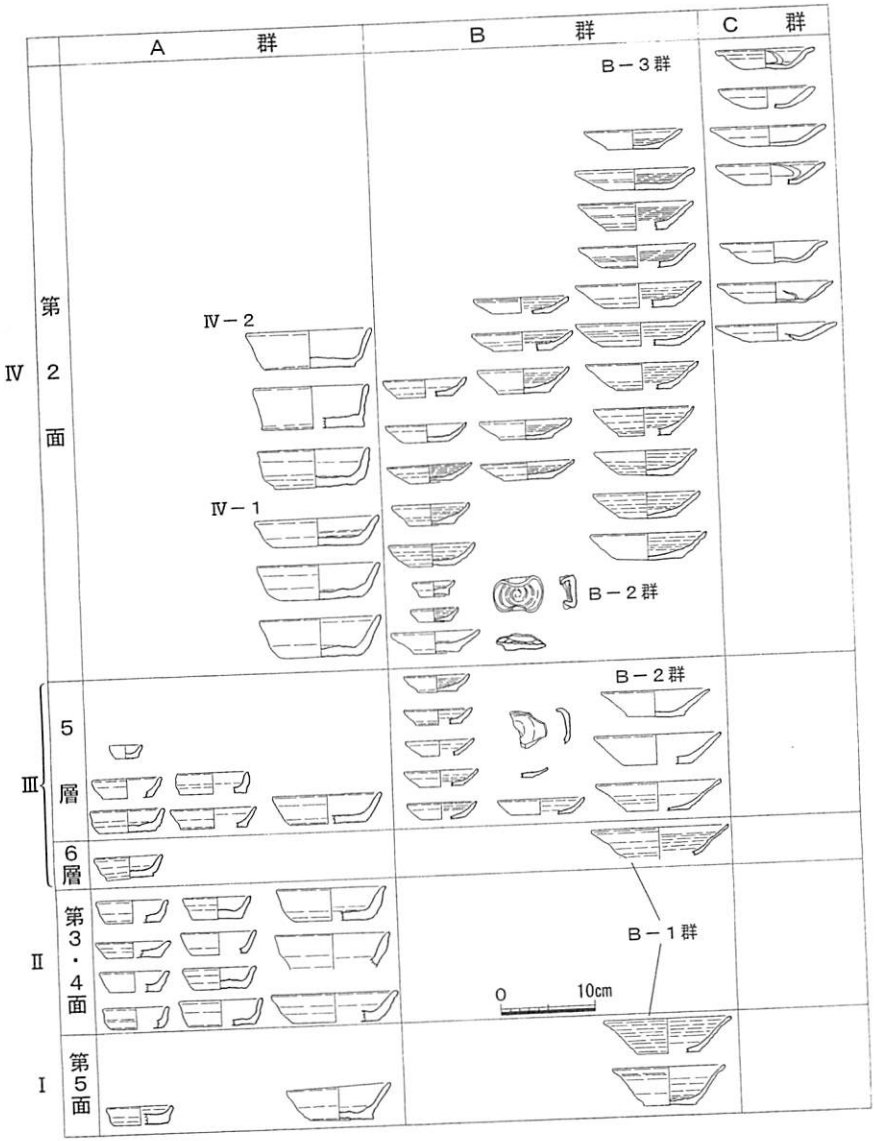
仮Ⅳ―3

A地点SX040・SX050・SX088・SK089・SX090出土土師器が該当する。SX040・SX050遺構は、B群でもB―3群が量的に多く確認され、少量のC群（京都系土師器）を供伴する。SX088・SK089・SX090遺構からは、C群が量的に多く出土し、B―3群が少量供伴する。

本相においても、前述のV相と同様にB―3群・C群共に皿形を呈し、それぞれ3法量以上の「法量分化」をしていることが確認される。本相のC群土師器は、V相のものと比較して薄い作りのものが多い点が指摘される。

仮Ⅳ―2

B地点SX075を切るSX070出土の土師器群が該当する。A群坏のみが出土しており、いずれも赤橙色を呈し、口径に対して底径比率が大きい。器壁が厚く、立ち上がり部分の内外面に強いナデを施した後、外底面稜部を著しく削り取っている。また、口縁部には強いナデを施すため、幾分外反気味にひらくものと、器壁が薄く、器面は内外面共に滑らかに仕上げられているものが確認されている。



第3図　大友氏館跡第6次・10次調査区出土土師器基本層序対応表（S＝1/8）

仮Ⅳ―1

SX075出土土師器が該当する。A群坏のみが出土しており、いずれも赤橙色を呈し器壁が厚く、口径に対し底径比率は大きい。いずれも外底面縁辺部分を削り取り丸く収めている。また、口縁部に強いナデ調整をおこなっているため体部は外反気味に開く。

Ⅲ相　盛土整地層（SX009・SX038）出土土器

大友氏館跡第六次調査区のSX009・SX038出土土器群が該当する。本相は、Ⅴ相と同様に他相が遺構検出面というある程度の使用期間を有するのに対し、地業行為を示す鍵層を一つのメルクマールとして設定した。なお、Ⅲ相以下においては、C群土師器は確認されていない。この現象は、B―3群・C群の導入が盛土整地後、すなわち、大規模な地形改変の後におこなわれたことを示唆する。すなわち、両群は、「大量消費型式」とでもいうべき土師器群であることが指摘できる。

A群は、Ⅳ相のものと比較して器高が低いものが大半を占める。法量に関しては、基本的に坏と小坏という二法量の組み合わせで、器種分化の進展が見られない段階のようである。[26]

B群に関しては、Ⅳ相以上では大半を占めるB―3群が確認されていない。Ⅲ相のB群土師器としては、赤橙色を呈し、Ⅲ形を採り、顕著なロクロナデ痕跡を残す一群が確認される。また、これらの資料は、Ⅳ相のB―3群よりも薄手である点が指摘され、回転速度の速いロクロを用いて時には一～二㎜程の薄い器壁を挽き出した個体が確認される。便宜上、この一群をB―2群とする。B―2群資料は、三法量以上の法量分化を起こし、その組成には耳Ⅲをも含む組成を保持していることが把握される。また、SX038からは、乳白色を呈する薄い土器が出土している。

Ⅱ相　第3・4遺構検出面併行

大友氏館跡第六次調査区の第3・4面出土土器群が該当する。

A群内においては、多様な形態のバリエーションが確認される。法量に関しては、依然として坏と小坏の組み合わせという

器種分化の進展が見られない段階のようである。[27] 第3・4面からは、小皿・坏ともに、体部下半を丸く収めるようになる。

B群においては、乳白色を呈する薄い土器の小破片が多数確認される。

Ⅰ相　第5遺構検出面併行

大友氏館跡第六次調査区の第5面出土土器群が該当する。

A群内には、坏と底部の厚いコースター状の器形を呈す小皿が出土している。また、内湾気味に立ち上がる小皿も確認される。

B群内には、乳白色を呈し、A群と比較して回転速度の速いロクロを用いて一～二㎜程の薄い器壁を挽き出した個体が確認される。この乳白色のものに関しては、小破片がⅢ・Ⅱ相にも含まれる点が指摘される。便宜上、この一群をB―1群とする。また、赤橙色の個体も確認されており、本相におけるB群には、多様な形態バリエーションが併存するようである。

二―五　層位学的遡行法的解釈における土器相変遷の把握　―遡行法―

本章においては、層位学的方法によって発掘調査過程における「出土という現象」の発生順序をもとに、遡行法的に土器相の変遷傾向を把握する。この発生順序は、調査者の経験・認識順序とも言い換えることができ、解釈学における「先入見」の堆積過程であるとも言い換えることができる。

以下、遡行法的に把握された変遷傾向を整理する。

1. Ⅴ・Ⅳ相に関しては、少量のA群とB―2群を含むが、その大半は斉一性の強いB―3群・C群により構成される。
2. Ⅲ相以下では、C群土師器（京都系土師器）が確認されていない。
3. Ⅲ相以下では、大量廃棄行為が確認されていない。
4. B群土師器は、上層から下層へと、B―3群（Ⅴ・Ⅳ相）→B―2群（Ⅳ・Ⅲ相）→B―1群（Ⅱ・Ⅰ相）と確実に器高が高くなる傾向が見られる。

5. Ⅱ相以下は、A群とB－1群により構成されるが、その大半をA群が占める。A群は、多くのバリエーションを有し、大群としてはまとまりの悪いグループである。

6. Ⅲ相を挟んで、上層は器種分化すなわち法量分化が起きているが、下層に関しては、器種分化が確認されていない。

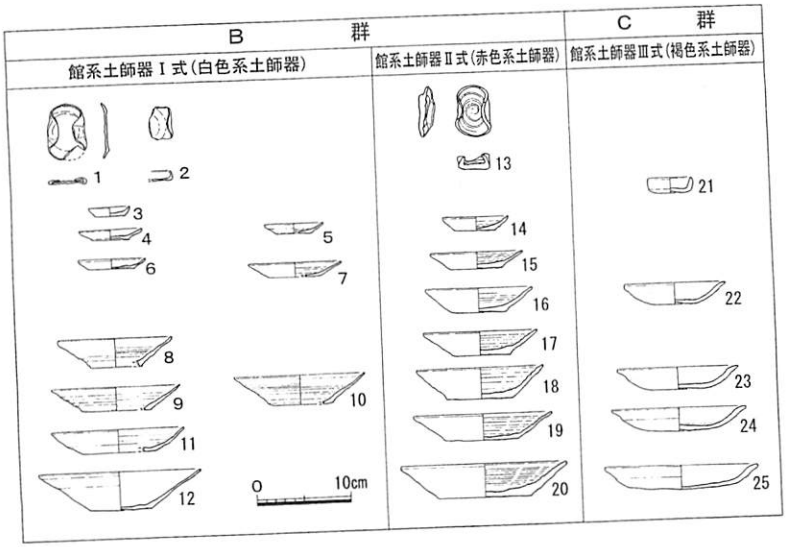
以上のような整理から、変遷傾向は、Ⅲ相を挟んで、Ⅳ相とⅡ・Ⅰ相では大きな差異が認められる。Ⅳ相においては、大量使用、法量分化と京都系土師器を主体とした土器組成が形成されている点が指摘され、Ⅲ相では、B群において既に法量分化が達成されていることが確認される。すなわち、正確に言うとⅢ相形成の理由が生まれたⅡ相末期には、法量分化が達成されていたと考えられる。

一方、Ⅱ・Ⅰ相に関しては、B群を若干含むが、その大半がA群によって構成されている。器種分化は、小坏と坏、或いは小皿と坏のセットで構成される。また、端的に言うと、土師器群は、下層へと調査が進むに従って斉一性が緩み、まとまりが悪くなってくる傾向が指摘される。

三　資料補填と型式設定　―地層同定の法則―

大友氏館跡六次調査区出土資料に関しては、前述の如く、厳密な法量の計測には適さない資料が大半を占めるのが現状である。よって、よりよい各土器相構造の解釈をおこなうため、大友氏館跡比定地内における他の調査地点出土資料を用いて、再度、分類をおこなう。

前述のA群・B群・C群という三分類に関しては、あくまでも器種を考慮しない形状分類であった。しかし、A・B両群が純粋な形状分類であったのに対し、技術系譜そのものが異なるC群は、事実上、型式分類であったといっても過言ではない。すなわち、A・B群とC群は、分類上、同レヴェルではなかった。よって、A・B両群から、C群クラスのレヴェル分類を抽出し、より武家邸宅的な土器相を把握したい。まずは、館跡から特徴的に出土するB群土師器[28]の細分類を抽出する。



第４図　大友氏館系土師器分類表（Ｓ＝1/8）

第４図のＢ群土師器は、館跡比定地から特徴的に出土するものである。両土師器は、型式設定に耐え得る極めて強い斉一性を備える。両型式は、館系土師器というべき土器群で、Ⅰ式が乳白色胎土を、Ⅱ式が赤橙色胎土を用いる特徴的なものである。

館系土師器Ⅰ式（Ｂ―１群）

館系土師器Ⅰ式（第４図１～12／１次・11次・13次調査出土遺物）は、乳白色粘土を用い、回転速度の速いロクロを用いて一～二㎜程の薄い器壁を挽き出すものである。器壁の内外面にロクロ挽き痕を顕著に残す。

法量は、４～５法量以上を備え、その組成には、耳皿を含む。Ⅰ相段階で、すでに確認されており、出土破片点数によるとⅢ相をピークに次第に出土量を減じてゆく傾向にある。

館系土師器Ⅱ式（Ｂ―３群）

館系土師器Ⅱ式（第４図13～20／３次調査出土遺物）は、赤橙色の胎土を用いている。新段階と古段階に分けることができる。器壁は、Ⅰ式と比較すると三～四㎜とやや厚く、外面がロクロナデによる平滑仕上げ、内面はヘラ挽きによる螺旋状の窪みが観察

される。Ⅲ相において、Ⅱ式の古段階と考えられる螺旋状の窪みが単なるロクロナデである1群（B―2群）も確認されている（便宜上、Ⅱ（古）式[29]とする）。

法量は、6～7法量以上を備え、その組成には、耳皿を含む。

Ⅳ相以降で、確認される。

両型式は、共に相似的といってよい法量器種分化がなされており、故実書に箸置きとして伝えられている耳皿を器種組成に含む。耳皿が、西日本において分布的に広がりを見せはじめる時期は、十五世紀中頃といわれ、その耳皿を含む組成は、南北朝時代を経過した後、新たに定式化された武家儀礼様式の一端であると考えられる。なお、同時期の京都では、器種分化が進展し始める点が指摘されており[30]、耳皿の存在や多法量化など、京都での組成変化が各地に影響を与えた可能性が指摘される。Ⅲ相は、盛土整地という地業時の土器相を示すものであるから、着工時の生活面であるⅡ相段階には4～5法量以上の分化が起きていた可能性が指摘できる。すなわち、Ⅱ相は、遅くとも十五世紀中頃以降と推定される。

また、大友氏館跡六次調査区の層位学的検討において、順序的にはⅠ式がⅡ式に先行することが、量的にはⅡ式がⅠ式を凌駕することが判明している。この現象に関しては、Ⅰ式が精製土器（すなわち、少量生産）の段階、Ⅱ式が大量使用（すなわち、大量生産）の段階と解釈することができる。

京都系土師器すなわちC群土師器は、Ⅳ相における遺構の切り合い関係（破壊／被破壊関係）から、Ⅱ式に後出することが判明している。前述のとおり、豊後国の守護所たる大友氏館跡の土器組成は、領国内各地における土器組成の遷移に対してイニシアティブをとることが想定されるため、京都系土師器の導入は大友氏の居館より始まるものと考えられる。京都系土師器は、Ⅰ・Ⅱ式に後出し、前述の通り型式として捉えることが可能な斉一性を備える。よって、京都系土師器を館系土師器Ⅲ式として設定する。

館系土師器Ⅲ式（C群）

館系土師器Ⅲ式（第4図21～25／3次調査出土遺物）は、黄白色の胎土を用いている。器壁は、導入時には二～三㎜と薄いものが、後に五㎜前後と次第に厚くなる。法量は、6～7法量以上を備える。武家儀礼という限定的な用途を考えると、Ⅰ・Ⅱ式土師器の方がより伝統的な器種組成を有していたのかもしれない。Ⅲ式は、当初から大量生産そして大量使用品であったものと考えられる。

B群土師器は、十五・十六世紀代の旧大友領国域から出土するが、館系土師器Ⅰ・Ⅱ式に限ると、居館跡や領主層惣墓といったクラスの遺跡から限定的に出土することが指摘される。[31] また、館系土師器Ⅲ式に関しては、出現当初は限定的であるが、中世府内町跡においては一般的に出土する傾向にある。この現象に関しては、中世府内町の構造も含めて検討を加えてゆく必要がある。

四　館系土師器の出土分布　―二つの出土状況―

館内における土師器の大量消費遺構に関しては、二種四類、存在することに注目しなければならない。

出土状況A種―1類　掘り込みを伴う、完形或いはそれに近い状態で埋置されたと考えられる状況
出土状況A種―2類　掘り込みを伴わない、完形或いはそれに近い状態で埋置されたと考えられる状況
出土状況B種―1類　掘り込みを伴う、破片化された上で大量廃棄された状況
出土状況B種―2類　掘り込みを伴わない、破片化された上で大量廃棄された状況

このような土師器の大量消費遺構の分布に関しては、Ⅰ式土師器が第1図の地籍図番号3・5・6・7・8に、Ⅱ・Ⅲ式土師器が2・3・6・7・8に出土が集中する。B種の出土状況に関しては、館跡に特徴的な出土状況であることが指摘できる

が、A種の出土状況に関して言えば、地鎮や井戸祭祀などの祭祀行為に比定されるものである。B種に関しては、推定大友氏館跡調査地点の分布状況が東半部分に集中していることに起因する可能性も有するが（第1表参照）、西半部分に位置する第二・五・七・八次調査いずれの調査においてもB種の大量廃棄土坑が確認されていないことからも窺える傾向である。また、B種の出土状況に関しては、Ⅳ相以降で顕著に確認される。また、東半部では、A種とB種を混合したような事象も確認されている。今後、祭祀と儀礼の差異に関して、一考を要する事象である。

五　土器相変遷の意味について　―解釈―

館系土師器と、その使用方法に関しては、前述の通り、Ⅰ～Ⅱ相とⅣ相というⅢ相を挟んで上層と下層の二つに大きく分けることができる。この二つのまとまりを画するのが、Ⅲ相という二枚の整地層である。この二層の整地層は、館に大規模な改変を加えた時期のものであることが指摘できる。

五―一　Ⅳ相以後（十五世紀末～十六世紀後半）

層位学的には、館系Ⅲ式土師器すなわち京都系土師器は、Ⅳ相以降に採用されたことが判明している。京都系土師器の導入時期に関しては、各氏より十五世紀末～十六世紀前半間における導入が指摘されており、遅くとも、天文年間頃には導入されていたと考えられる。[22] この時期の大友家当主は、政親・義右・親治・義長・義鑑が挙げられる。特に義鑑の残した書状に知られる「乾屋敷普請」や「土蔵之材木以切符申候」、「遠侍戸悉損候」、「門之材木、早速運送祝着候」、「就女中屋作」、「役所台所上葺之儀」等、武家邸宅を構成すると考えられる各施設の建築や修理を指示する文書には、注目せねばならない。義鑑の後にも、義鎮が「御土囲屏之儀」、「石細工之儀」、「土井廻屏之儀」、「土井廻屏之儀」、義統は「府内屋敷」、「東之築地」という記述を残している。

Ⅳ相に関しては、土器相的にも①館系土師器Ⅱ式新相の導入、②館系土師器Ⅲ式の導入、③大量消費行為、④法量分化の進

展という武邸宅に比定するための重要な事象が確認されているため、Ⅳ相以降は確実に武家邸宅として機能していたことが指摘される。武家邸宅としての機能停止時期に関しては、二〇〇二年における大分市教育委員会の調査において、館跡の最終段階には、東端部に東西方向の短冊状地割が展開する可能性が指摘されている。すなわち、Ⅴ相に関しては、島津侵攻直後すなわち館廃絶時の様相を含むものであることが指摘される。

これらの記述年代と土器相の変遷に関しての整合性を積極的に解釈すれば、Ⅳ相以降、すなわち、二枚の整地層形成以後を、義鑑・義鎮・義統代を含む時期に比定することができる。館系土師器Ⅱ式古相は、その初源がⅢ相（厳密に言えばⅡ相末期）に比定され、館系土師器Ⅱ式新相・Ⅲ式はⅣ相以降に登場する。

五―二　Ⅲ相以前（十四世紀末～十五世紀後半）

Ⅲ相以前には、どのような年代観を付与してゆけばよいであろうか。今回の層位学的方法に基づいた土師器研究の成果としてⅠ・Ⅱ相に関しては、共伴の陶磁器から最大幅十四世紀末～十五世紀中頃間に位置付けられると考えている。勿論、更に時期を絞っていく必要があり、今後、Ⅰ・Ⅱ相におけるA群土師器と館系土師器Ⅰ式の共伴関係・組成の変遷に関して、より詳細な究明が望まれる。Ⅲ相に関しては、Ⅱ相の状況が含まれていると考えられる。すなわち、Ⅱ相の最終状況が包蔵された層位である。[33]

五―三　解釈

武家邸宅出土の土師器坏・皿、所謂「供膳形態」の検討をおこなうには、「武家故実」の知識を必要とする。考古学的に、大友氏館跡出土遺物は、上限を十四世紀末以降に求めることができるため、室町幕府的「武家故実」を時代性・使用法等、解釈のモデルとして引用することができる。

時代性という面では、上限である十四世紀末に関しては、南北朝時代末期にあり、故実世界の混沌期にあったことが指摘できる。しかし、室町幕府将軍足利義満治世下における、この時期の重要な事象として、一三七八年の「花の御所」建設には、

層位	土器相	土器群組成			法量・使用法	故実変遷	年代観
		A群	B群	C群			
④層	Ⅴ相	△	○	◎（Ⅲ式新相）	斉一性の弛緩	解体期	16世紀後半
第2面	Ⅳ相	△	◎（館系Ⅰ・Ⅱ（新相）式）	◎（Ⅲ式古相）	多法量化のピーク 大量使用の増加 館系Ⅱ・Ⅲ式の斉一性の強化	拡散期	15世紀後葉～16世紀前半
⑤・⑥層	Ⅲ相	○	○（館系Ⅰ・Ⅱ（古相）式）	×	多法量化の開始 大量使用の開始 館系Ⅰ・Ⅱ式の斉一性の強化	標準期	14世紀末～15世紀後半
第3・4面	Ⅱ相	○	○（館系Ⅰ式）	×			
第5面	Ⅰ相	○	○（館系Ⅰ式）	×	館系Ⅰ式の確認	収束期	

第2表　土器相・年代観対応表

注目しておかなければならない。室町幕府的武家故実世界の大まかな変遷としては、南北朝期（十四世紀後半）の「混沌期」→南北一統後（十五世紀前葉）の安定期ともいえる「収束期」→そして収束期に形成された「先例」という「範型」形成以後の「標準期」（十五世紀中葉）→応仁の乱後の守護在国政策に伴う「拡散期」（十五世紀後葉）→拡散後における地方的解釈と室町幕府滅亡後の「解体期」に段階付けることができよう。[34]

第2表は、土器相と年代観、故実世界の変遷を整理したものである。これを参照すると、やはり、Ⅲ相以下に問題が残る。館系土師器Ⅰ式や、府内以外における館系土師器Ⅱ式は、豊後国内において居館などの拠点的な遺跡・遺構から特徴的に出土する遺物である。よって、経験則的に、館系土師器Ⅰ式のまとまった出土が確認されるため、少なくとも東半に関しては、この大友氏館跡比定地がⅠ式導入時に武家邸宅であったことは間違いないと考えられる。Ⅴ相の斉一性の弛緩が「解体期」、Ⅳ相の多法量化のピーク・大量使用の増加が応仁の乱後における「守護在国」政策に連動する「拡散期」に当たることにも異論がないであろう。

問題は、館の初源にかかわるⅠ～Ⅲ相の解釈であり、これらの土器相が故実世界に於ける「収束期」に当たるのか、「標準期」に当たるのか、という点にある。この問題は、すなわち、館の形成が足利義満に始まる「花の御所」体制に敏感に反応したものと考えるか、洛中洛外図屏風に描かれる「柳原御所」[35]・

「今出川御所」[36]体制とも言うべき「標準化」傾向に連動するものであるのかということである。

館系土師器は、これらの居館等において武家儀礼に用いる儀器として使用されたものである。その背景には、故実世界が存在し、この故実知識という文化資本を統治イデオロギーに利用しようとする権力側の意志を表象する遺物であると捉えることができる。

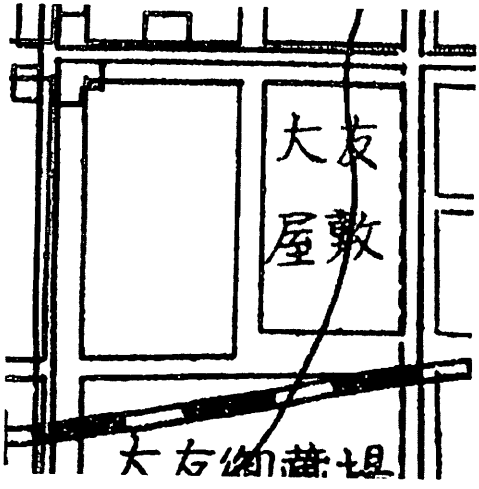
六　館の規模と館内の施設配置案に関して　―Ⅳ相以後の理解―

最後に、土器相の変遷から、館の構造に関して、若干の予察を加えて終章としたい。

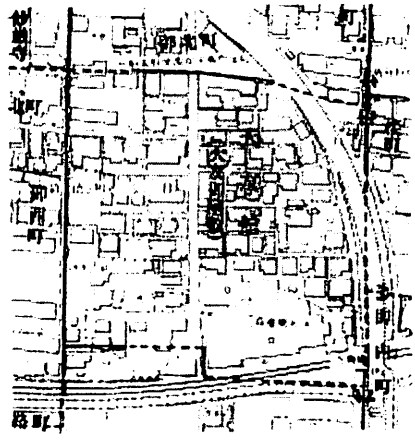
前述のとおり、大友氏館跡の規模に関しては、昭和六十二年刊行の『大分市史』の「戦国時代の府内復元想定図において方二町規模に推定されている（第5図）。それ以前の昭和三十年刊行の『大分市史』に関しては、館周辺の町名配置に問題を有するが、「大友役所」として南北二町×東西一町規模の推定案が提示されている（第6図）[37]。六十二年度版は、寺院や史蹟の位置・明治時代の地籍図をもとに方二町規模を復元しているが、三十年度版に関しては、二町×一町規模に復元した理由に関しては言及が成されていない。端的な評価として、両案の決定的な違いは第三南北街路の位置にある。

第7図は、昭和六十二年度版案大友館跡推定エリア内における発掘調査地点配置図である。図中、発掘調査によって検出された溝跡や土塁跡等の区画施設を実線で、推定線を破線で表現している。これらの発掘調査によって得ることができた成果をもとに、『大分市史』の昭和三十年度案と昭和六十二年度版の館範囲推定エリアに修正を加え、これを現代地図に落としたものが第8図と第9図である。三十年度案に関しては、発掘調査の成果から南限に問題を抱えていることは明らかである。

第7図中において、東側は、溝遺構により「二町×一町」の長方形に画されていることが見て取れる。問題は、西側である。第二次・第五次調査において検出された土塁遺構に関しては、昭和六十二年度案における北西、約四分の一区すなわち一町四方を画すものである可能性が考えられる。



第5図　昭和30年版『大分市史』大友館跡推定範囲（S＝約1/5000）



第6図　昭和62年版『大分市史』大友館跡推定範囲（S＝1/5000）

第二次調査において土塁削平後に掘り込まれている井戸（SE060）祭祀遺物には、館型土師器Ⅱ式が含まれているためⅣ相に比定される。すなわち、Ⅳ相には、土塁が削平されていたことが分かる。

今回検討を加えた館跡に特徴的に出土する館系Ⅰ式土師器が集中して出土するエリアは、昭和六十二年度版『大分市史』案の東半部分を指し、昭和三十年度版の「大友屋敷」・「大友役所」の全域を指す。Ⅱ・Ⅲ式に関しても同様である。六十二年度案西側に関しては、現在のところ、調査区が2・5・7・8次と北西の四分の一区画内に限られており、調査面積が東側に比べて狭いものである。その四分の一区画は、溝や土塁に画されていたことが推察され、それらの調査においては、遺構や生活遺物が極端に少ないという傾向が伺われる。これは、推定館エリア内におけるどのような変遷を示唆する事象と解釈できるであろうか。

全国的な守護館跡における考古学的成果としては、そのほとんどが十五世紀後半代を初源とするものが多い。坂井秀弥氏によると、これは応仁の乱後、「守護在京の原則」が崩れ、「守護在国」という本格的守護領国の形成という大きな社会変動の中に位置付けられる事象であるとする。[38]

全国的な守護所の発掘調査事例からは、その初源が十五世紀後半に

求められることが多い。しかし、花の御所体制を考えるのであれば守護所の初源に関しては、その多くが南北朝初期に初源を持つとされる傾向があることには留意が必要であるように思われる。大友氏館跡の初源に関する問題は、今まで何等定説が存在しなかった。また、従来から指摘されていることではあるが、大友氏の施策に関しては、「守護在京の原則」に則るものではないことにも注目せねばならない。

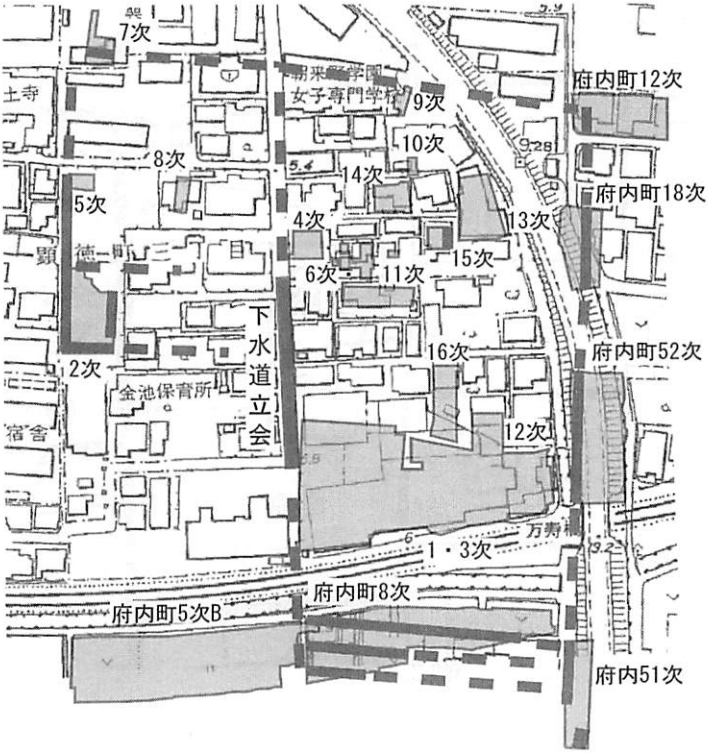
今回、層位学的方法と、土器相の把握という方法から、最下層であるⅠ相に関しては、十四世紀末〜十五世紀中頃という年代観を付与した。大友氏の家督で言うと十代親世から十五代親重（親繁）までである。歴史的に言うと、南北朝動乱の収束から、応仁の乱頃までの期間を指す。十一代親著〜十四代親隆までは、豊後国内は内乱状態であるので、守護館を整備するには、南北朝「収束期」の親世か、豊後内乱の収束期でもある「標準期」の親繁の代が相応しいと考えられる。

親世の代に関しては、義満の所謂「花の御所体制」の時期、親繁の代に関しては「守護在國体制」の流れの中に位置付けることができる。また、それぞれの範型としては、「花の御所」と「今出川御所」の両者を挙げることができ、注意すべき点として、それぞれの範型は、「二町×一町」という長方形の平面プランを呈するという点にある。

「収束化」・「標準化」の時期であるⅠ〜Ⅲ相までに関しては、「方二町」規模の館規模は、故実規格に逸脱するものである。したがって、「東西一町南北二町」の規模に留めていた可能性が高いのではないだろうか。

「方二町」案を採るならば「拡散期」という地方における「武家故実」の再解釈期である親繁〜義鑑という十五世紀後半〜十六世紀前半間のいずれかの代に、「方二町」規模に拡大されたものと考えるのが順当であろう。[39] Ⅲ相という大改変以前に確認される館系土師器Ⅰ式の出土分布が、大友氏館跡比定エリアの東半部に集中すること、第Ⅳ相という時期における土塁の削平という大地業の痕跡は、この事象を示すものかもしれない。

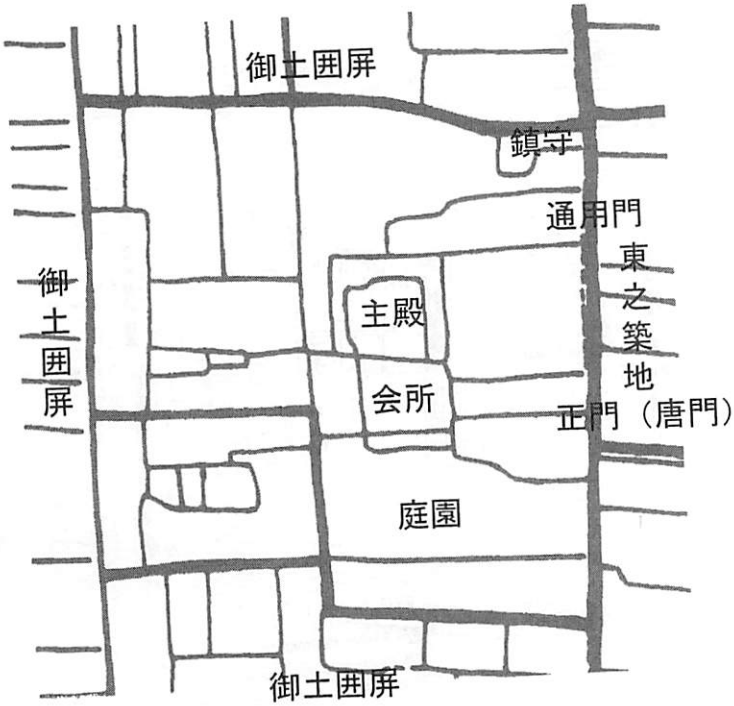
いずれにしても、館内施設に関しては、「洛中洛外図」に描かれている「柳の御所」・「今出川御所」という範型の影響を強く受けたものと考えられ、[40] 義鑑の「乾屋敷普請」や「土蔵之材木以切符申候」、「遠侍戸悉損候」、「門之材木、早速運送祝着候」、「就女中屋作」、「役所台所上葺之儀」、義鎮の「御土囲屏之儀」、「石細工之儀」、「土井廻屏之儀」、「土井廻屏之儀」、義統



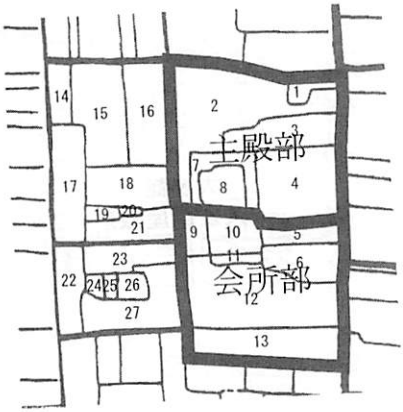
第７図　大友氏館跡関連調査区及び区画施設配置案（Ｓ＝1/3000）

第８図　昭和30年案改編図
（Ｓ＝1/5000）

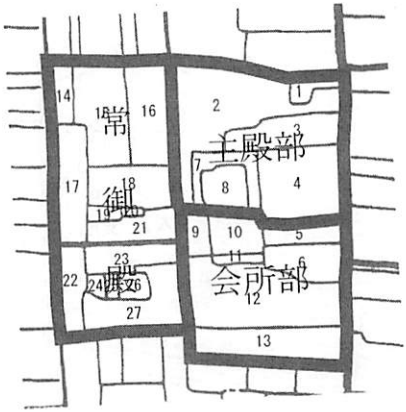
第９図　昭和62年案改編図
（Ｓ＝1/5000）



第10図　大友氏館跡内施設配置案（S＝1/3000）



第11図　「二町×一町」案における機能分化案（S＝1/5000）



第12図　「方二町」案における機能分化案（S＝1/5000）

の「府内屋敷」、「東之築地」という記述と地籍図を用いた検討からは、第10図のような館内施設の配置を想定することが可能であろう。また、「二町×一町」規模内における機能分化としては第11図のように、「方二町」規模内における機能分化としては、第12図のように想定される。[41]

おわりに

中世府内町が、京都を範型としているという意見は、木村幾多郎氏や小島道裕氏に代表されるが、事実、風水の四神相応観念に関しても、東に川が流れ、東に隣接するように迎賓館的な寺院が配置されている。[42]中世府内町の構造を考えた時、やはり、現在の比定地への位置付けが最も適切であると言えよう。今後の課題として、館跡の初源、その規模（四至の確定）、細かな施設配置や、それらの変遷過程の究明が挙げられる。中世府内町の構造中における大友氏館跡の位置付けに関しては、別項に期したい。[43]

本稿をまとめるにあたって、多くの方々にご助言を頂きました。特に飯沼賢司氏には、大分県地方史研究会における発表の機会を頂いたのに加え、多くのご助言を頂くことができました。文末ではありますが、ここに記して感謝の意を示させていただきます。

註

（1）豊後府内には、現在、二つの大友氏の館が知られている。一つは、上野台地にある通称「上原館」、いまひとつは、その東、大分川の河口部に面し『府内古図』に記述のある「大友御屋敷」である。本論において論じる「大友氏館跡」は、「上原館」と区別して、後者の「大友御屋敷」を指すものとする。なお、文中の館跡の発掘調査に関する記載は、大分市教育委員会・大分県教育委員会発行の概報及び現地説明会資料による。

(2) 大分市史編纂委員会　一九八七　「戦国時代の府内復元想定図」『大分市史』中巻付図Ⅱ　大分市

(3) 現に、第二次調査においては、遺構として地下より検出された土塁状遺構の東延長上に、19・20番という不可解な筆形状が接続している。これは、まさに地下情報が筆形状に表れた例であることが指摘できる。24・25・26に関しても、同様に地下情報を伝えているものと考えられる。

(4) 木村幾多郎氏の分類におけるA・B類
木村幾多郎　一九九三　「研究ノート　府内古図の成立」『府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報』一九九三年度　大分市歴史資料館
木村幾多郎　一九九六　「高国府・勝津留考」『府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報』Ⅴ　大分市歴史資料館
木村幾多郎　二〇〇〇　「府内古図再考」『府内及び大友氏関係遺跡総合調査研究年報』Ⅸ　大分市歴史資料館

(5) 上野淳也　二〇〇〇　「第二章　歴史的環境」『大友館跡－発掘調査概報Ⅱ－』　大分市教育委員会

(6) 高畠豊　一九九九　「大友館跡－発掘調査概報Ⅰ－」大分市教育委員会

(7) 今村仁司　『アルチュセール』現代思想の冒険者たち22　講談社

(8) 前川要氏の「方形館体制」も階層化装置というイデオロギー装置であると言える。

(9) 豊後国内の分布においては、後藤一重氏の研究がある。
後藤一重　二〇〇〇　『小路遺跡』大分県久住町教育委員会

(10) 上野淳也　二〇〇〇　『大友館跡－発掘調査概報Ⅱ－』　大分市教育委員会

(11) 乗岡実　二〇〇〇　「備前焼擂鉢の編年について」『第三回中近世備前焼研究会資料』中近世備前焼研究会

(12) 小野正敏　一九八二　「染付」『貿易陶磁研究』№2　日本貿易陶磁研究会

(13) 最下層において、口ハゲの白磁のⅨ類が確認されており、十四世紀の初頭に遡る可能性があるが、土師器との相対年代の兼合いを考慮すると十四世紀初頭まで遡ることは考えがたい。因みに、十四世紀初頭は、大友氏の菩提寺である万寿寺が創建されるなど、中世都市府内としての発展段階である。

太宰府市教育委員会　二〇〇〇　『大宰府条坊跡ⅩⅤ　陶磁器分類編』

(14) 人工層位に関しては、若干の問題を含む。それは、土層自体が人工的に製作されたものであるため、常に上層位に過去の遺物が混入してくる可能性を孕んでいる点にある。しかし、新出遺物に関しては、層位学的に下層に含まれることはないと言う事ができる。よって、取り扱う資料に関しては、各文化面に帰属し、混入遺物を含まない一括性の高い資料を用いる必要がある。また、分類に基づく総量的な検討も必要となってゆくであろう。

(15) 調査担当者は、その時点において、遺跡の最上面・最上層がどのように存在しているのか、すなわち、遺跡立地場所の現況を了解しつつ調査を進展させるため、暫定的であるとはいえ「遺跡のなれの果て」である結末を知っている点において、決定論的・目的論的問題を内包しているといえる。

(16) 糸切り底の観察は、本文中にもある通り、「ロクロ回転速度」や「ロクロの回転方向」の解明が可能である。これらの観察は、比較的忠実に技術系統の差異、ひいては技術者集団の差異を反映するものと考えられる。勿論、個人差の問題も控えていることを考慮しなくてはならない。

(17) この図表は、ノイズが含まれている可能性があるという意味で編年表ではない。あくまでも、層位対応表である。従って、上層へ向うほど新相を示す。

(18) 本稿においては、法量分化という観点から、「器形」という語にサイズに関わらず、器種を横断した相似的なニュアンスを含めて使用している。

(19) この群レベルの分類においては、各群同士は等価ではない。結果的には、器形の差異は製作技術の差異をも反映している場合が多いと考えられるが、技術の系列性に関しては、安易に器形のみから追求でき得るものではないと考えられる。

(20) 永原慶二　一九六八　『日本の中世社会』　岩波書店

(21) この資料は、大内氏館跡出土のA類土師器との類似が指摘されるが、直接的な技術関与に関しては不明である。今後の資料の増加が望まれるが、同等の高度な技術を有するものであることは指摘が可能であろう。

(22) 土器底部の糸切り離し痕跡から、A群の成形に用いたロクロより、B群の成形に用いたロクロの方が回転の速いものであったことが指

摘される。B群には、器壁が一～二㎜の厚みを呈し、その成形から高度なロクロ成形技術が必要であったと推定される小群が確認される。その薄い器壁の成形には、速い回転が必要であったと考えられる。

(23) 上野淳也　一九九九　「千人塚出土土師質土器について」『千人塚遺跡』大分県緒方町教育委員会

(24) 相（faize）という概念に関しては、アーヴィング・ラウスが『考古学への招待』の中で定義付けている「文化複合」的な意味での用法を想定して用いている。ここでは、中世前期的なA群組成、中世前期からの脱却を目指すB群組成、京都的なC群組成という複数の文化の重層性をより意識した概念として用いる。組成を小様式として考えれば、小様式の組み合わせが「相」を形成する。したがって、「相」の変遷は、ある複合から別の複合への変化を意味する。

(25) この点において、やはり、決定論的・目的論的問題を内包しているといえる。またこの問題は、後述の叙述・物語論的問題を抱えているものと考えられる。

(26) 吉岡康暢「中世的食器組成の成立と時期区分覚え書－九〇年シンポに寄せて－」中近世土器の基礎研究Ⅶ　一九九一　日本中世土器研究会

(27) 註26同文献

(28) 註10同文献

(29) 大友氏館跡六次調査においては、第2面でも比較的古い遺構群と5層に含まれる。整理すると、B－1群＝Ⅰ式、B－2群＝Ⅱ（古）式、B－3群＝Ⅱ（新）式となる。

(30) 小森俊寛・上村憲章　一九九六　「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『京都市埋蔵文化財研究所研究紀要』第三号　京都市埋蔵文化財研究所

(31) 後藤一重氏の研究がある。後藤一重　二〇〇〇　『小路遺跡』大分県久住町教育委員会
註23同文献
詳細は、別稿に期したい。

(32) 小野貴史　一九九九　「大友氏における「式三献」の導入について」『大分・大友土器研究』第二十五号　大分・大友土器研究会

(33) 整地土、すなわち、客土の供給地の土器組成が混在している可能性を有する。しかし、新しい様相に関しては、最終段階を示している可能性は高い。

(34) 上野淳也　二〇〇五　「考察　下志村遺跡第二次調査出土土師器について　〜海部衆の土器予察〜」大市教育委員会

(35)『町田本』。足利義晴が、大永五（一五二五）年末、上京に造営した御所である。

(36)『上杉本』。「花の御所」の故地に、足利義晴が天文八（一五三九）年〜同十一年にかけて再建した御所である。

(37)「洛中洛外図」の景観年代に関しては、今谷明氏の一五四七年説を採用している。

(38) 坂井秀弥　一九八八　『京都・一五四七年』　描かれた中世都市』イメージ・リーディング叢書　平凡社

今谷明　一九九四　「シンポジウムの成果と今後の課題　―越後府内と春日山城―」『守護所から戦国城下町へ―地方政治都市論の試み―』金子拓男・前川要編　名著出版

(39) 上野淳也　二〇〇五　「イデオロギー装置としての大友氏館跡」大分県地方史平成十七年総会発表資料より転載

(40) 歴博甲本＝「柳の御所」、歴博乙本＝「今出川御所」

(41) 小野正敏氏の概念図をベースとした案である。小野正敏『戦国城下町の考古学』講談社選書メチエ一〇八　講談社

文献と合わせた詳細な検討に関しては、別稿に期したい。

(42) 今後、館跡比定地内西側の解明に関しては、急務であることはいうまでもない。さらに館跡比定地南側の「御蔵場」比定地に関しては、C類古図にのみ記載された情報で、実際に御蔵場であった確証はなく、例えば犬追物や射場という武家故実をおこなう場等、公的空間としての評価を加えてゆかなければならないであろう。

(43)『史学論叢』第二十五号に寄稿予定。

（大分市東八幡五―六　スパハイツ四〇五号室）